

今週の為替相場見通し(2023年11月27日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		147.16 ~ 149.99	149.47	148.00 ~ 151.00
ユーロ	(ドル)		1.0853 ~ 1.0965	1.0934	1.0750 ~ 1.1000
(1ユーロ=)	(円)		161.27 ~ 163.62	163.44	160.00 ~ 165.00
英ポンド	(ドル)		1.2448 ~ 1.2615	1.2605	1.2400 ~ 1.2800
(1英ポンド=)	(円)	*	184.47 ~ 188.66	188.34	185.00 ~ 190.00
豪ドル	(ドル)		0.6500 ~ 0.6591	0.6585	0.6500 ~ 0.6700
(1豪ドル=)	(円)	*	96.84 ~ 98.54	98.37	97.00 ~ 99.50

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

金融市場部 為替営業第一チーム 尾身 友花

(1)今週の予想レンジ: 148.00 ~ 151.00 円

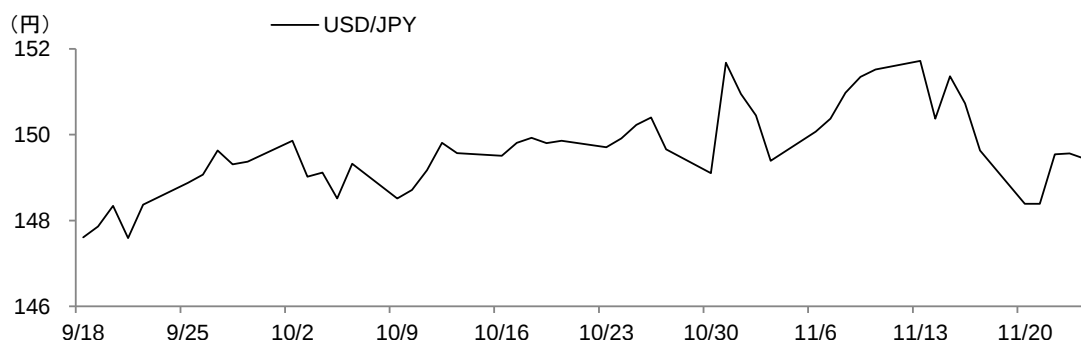
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は、米金利低下を受け週初に下落も、その後は水準を戻した。週初20日、149.97円でオープンしたドル/円は、中国人民元買い・ドル売りが波及し、149円台前半へ下落。海外時間は、米20年国債入札の堅調な結果などを受けた米金利低下を背景に、148円台前半に続落した。21日、ドル/円は米金利続落を受け、一時147円台前半に下押し。海外時間は、約2か月ぶりの安値となる147.16円に下落してスタートも、ドルの買い戻しや、ややタカ派な内容となったFOMC議事要旨(11月会合分)を受け、148円台半ばに水準を戻した。22日、ドル/円は米金利上昇を横目に149円付近に上昇。海外時間は、米失業保険申請件数の強い結果や、米11月ミシガン大学調査(確報)における期待インフレ率の上方修正を受け、米金利が上昇する流れに合わせ149円台後半に続伸した。23日、ドル/円はドル売り相場の中、149円付近にじり安。海外時間は、欧州金利上昇を受けユーロやポンドが買われる流れに合わせ、149円台後半に往って来いとなった。週末24日のドル/円は、149円台でもみ合いが継続した。欧州通貨買いドル売りによるドル/円の下落とクロス/円の上昇によるドル/円の上昇により一進一退となり、149円台半ば付近でクローズした。

今週のドル/円は148円~151円でのレンジ取引を予想しており、今週は米FRB高官の発言や経済指標などのイベントが多いため、イベントの結果に一喜一憂する展開となりそう。30日(木)は、米10月PCE(個人消費支出)デフレーターが発表されており、前回値を下回る数字が予想されている。一方で、前月の前月比結果は高い伸びとなっておりインフレ減速に予断を許さない状況となった。また、同日には、米11月ISM製造業景気指数の発表が予定されており、前月の結果は9月の結果と予想値を下回る結果となり弱い結果が続いている。また、1日(金)にはパウエルFRB議長が討論会に参加する予定となっており、利下げに慎重な姿勢を見せる氏の発言に注目が集まる。まちまちの経済指標結果や複数のFRB高官の発言により相場に動きが見られるが方向感が定まらず行ったり来たり値動きとなるのではないだろうか。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(11/20~11/24)の値動き: 安値 147.16 円 高値 149.99 円 終値 149.47 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部 為替営業第二チーム 逸見 久貴

(1) 今週の予想レンジ: 1.0750 ~ 1.1000 160.00 ~ 165.00 円

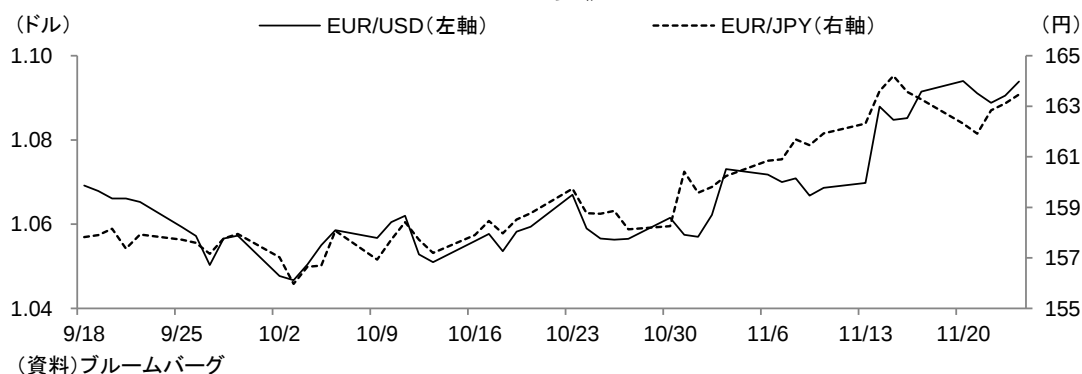
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは、1.09ちょうどを挟んでレンジ推移となった。週初20日、1.0905でオープンしたユーロ/ドルは、米独金利差縮小を背景に、底堅い推移。欧米株高も相まって、じり高に推移すると1.09台半ばまで上昇。21日、ドル売り相場の継続を受け、一時週高値となる1.0965に続伸も、ドルの買い戻しの流れに合わせ、1.09台前半に反落した。22日、独金利の低下や米経済指標の強い結果を受けた米金利上昇がユーロの重しとなり、1.09台を割り込むと、一時週安値となる1.0853まで下落した。23日、ユーロ圏11月製造業/非製造業PMI(速報)の良好な結果が好感され、独金利上昇に合わせ1.09台前半に上昇。24日、感謝祭と週末の谷間の金曜で市場参加者が少ない中、1.09台前半での小確りとした推移が継続。独11月IFO企業景況感指数が予想を若干下回ったが市場の反応は薄く、1.0934で越週した。

今週のユーロは上値重い推移を予想。30日(木)にユーロ圏11月消費者物価指数(速報)を控えるが、10月の結果(確報)は総合ベースで+2.9%(前年比、以下同様)と9月の+4.3%から大きく減速。また、エネルギー、食料品、アルコール、タバコを除いたコアベースでは+4.2%と9月の+4.5%から減速した。インフレ鈍化が確認されれば、ECBによる早期利下げが意識され、ユーロ売り地合いとなるか。加えて、今月は米国の利上げ期待の剥落やこれを受けたリスクセンチメントの改善によって、大きくユーロ高が進んだこともあり、ポジションの巻き戻しを伴いながらユーロが弱含む展開となり易い。また、10月のECB政策理事会では、10会合連続で実施してきた利上げが遂に据え置かれ、ラガルドECB総裁からも域内経済の低迷が継続するとの見通しの下、引き締め効果を見極めるスタンスが示されており、利上げ局面は本格的に終了した印象。米対比タカ派な政策運営という金利面でのアドバンテージが剥落する中、ユーロが上値を目指す展開は難しいと考える。

(3) 先週までの相場の推移

先週(11/20~11/24)の値動き: (対ドル) 安値 1.0853 高値 1.0965 終値 1.0934
(対円) 安値 161.27 高値 163.62 終値 163.44



3. 英ポンド

欧州資金部 中島 將行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2400 ~ 1.2800 185.00 ~ 190.00 円

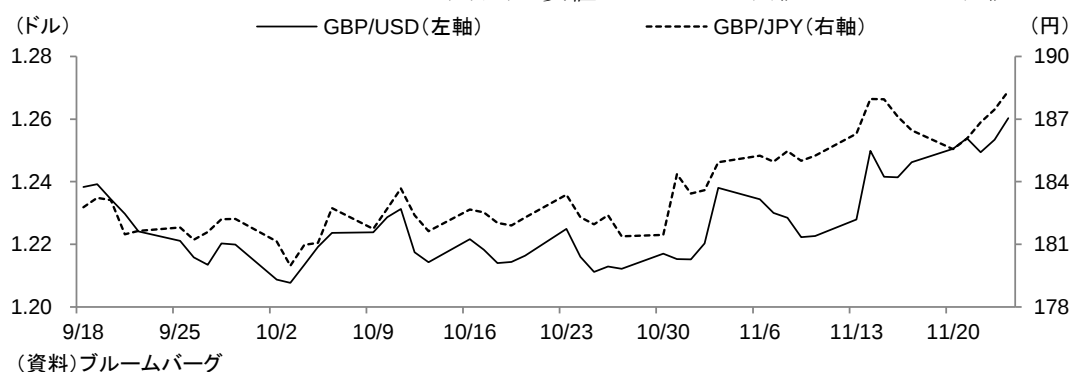
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週1週間のポンド相場は大きく上昇し、今年9月初旬以来となる対ドル1.26に到達した。ポンド/円も2015年11月以来となる188円台に上昇している。ただし、対ユーロ相場では11月24日公表の独11月Ifo企業景況感指数など堅調な指標がユーロ圏で相次いだこともあり、横ばいの動きとなった。英ポンドの上昇を後押ししたのは、11月23日に発表された英11月製造業とサービス業のPMI速報値であろう。11月サービス業PMIは50.5と10月の48.7から上昇し、市場予想の49.5を上回った。11月製造業PMIは46.7と10月の44.8から上昇し、市場予想の45.0を上回った。とりわけサービス業PMIは好不調の節目となる50.0を2023年7月以来、4か月ぶりに上回ったことは、英国経済を支える要因になると見込まれる一方、先進国の中でもとりわけ高い賃金上昇率(週平均賃金の上昇率は2023年7~9月期時点で前年同月比+7.9%)が高止まりし、ひいてはインフレ抑制にはより時間がかかる可能性が高いことを示唆している。PMI発表の前日22日には、ハント英財務相が秋季財政報告を公表し、来年もしくは再来年の1月までに見込まれる総選挙を前に、個人向け及び法人向けの減税策を打ち出している。ハント氏は、設備投資額の100%を課税控除とする企業向けの特別減税措置を恒久化するほか、給与天引きされる被雇用者負担の国民保険料率を2%引き下げると発表している。英国での大型減税というと、どうしても2022年9月のトラス減税の時の混乱が頭をよぎるが、英国での報じられ方を見る限り、的を絞った減税であるという評価だ。もともと、減税の財源の捻出に関しては、選挙が行われる公算の大きい2024年以降の緊縮財政を前提にしていることから、公共サービスの悪化につながる可能性が大きい。市場の反応は総じて限定的だったが、先行き高成長が見込みにくい英国経済において、「打ち出の小槌」は無いことを改めて意識させる内容となった。

今週1週間のポンド相場は総じて材料不足の感は否めないが、先週に発表された経済統計や財政政策の金融政策に対するインプリケーションを巡り、ベイリー総裁(11月29日講演)らイングランド銀行(BOE)の高官発言には耳を傾ける必要があるだろう。総じてタカ派的なコメントが想定され、ポンドにとってサポート材料となる公算が大きい。対円相場で2015年8月以来となる190円を突破するかも一つの焦点となろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(11/20~11/24)の値動き: (対ドル) 安値 1.2448 高値 1.2615 終値 1.2605
(対円) 安値 184.47 高値 188.66 終値 188.34



4. 豪ドル

金融市場部 為替営業第二チーム 鈴木 智大

(1) 今週の予想レンジ: 0.6500 ~ 0.6700 97.00 ~ 99.50 円

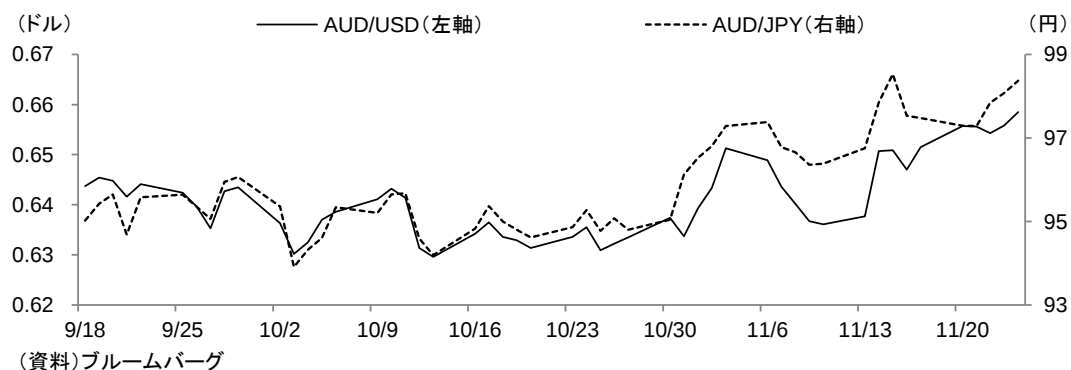
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

週初20日の豪ドルは0.6510でオープン。中国人民銀行が人民元の基準値を8月以来の元高設定にしたことを受けて、人民元を中心にドルが売られたことから、0.65台半ばまで上昇。その後も先週末からの流れからだらだらとドルが売られる展開にその後も水準を維持して引けた。21日はRBA議事要旨で、インフレ減速予測があと1、2回の利上げを前提にしていることが判明したこともあり、底堅い推移が継続。米国時間には0.65台後半まで上値を伸ばすも勢いは続かず、0.65台半ばでの推移に落ち着いた。22日は先週末から売られ気味だったドルが買い戻される動きに、豪ドルは上値の重い推移。米11月ミシガン大学期待インフレ率の確報が上方修正されたことを受け、0.65台前半まで下押されるも決定打に欠け、0.65台半ばまで値を戻す展開となった。23日は豪11月製造業PMIとサービス業PMIが前回を下回る結果となったものの、特段材料視されず。米国、日本がともに休日で市場参加者が限定的となる中、ここ数日のレンジ内で方向感を欠く値動きとなった。24日もしばらくは0.65台半ばでの推移が続くも、10月製造業PMIが予想を下回ったこともあってかドル売りが強まると、一時週間高値となる0.6591まで上昇。その後も高値圏での推移を続け、0.6585で越週した。

今週の豪ドルは底堅い推移になることを予想する。先週発表されたRBA議事要旨では、「2025年末までにインフレ目標を達成できないリスクが高まっている」、「インフレ率を目標に戻すという決意を堅持」といった趣旨の内容が確認された。会合時の声明文内のフォワードガイダンスでは、トーンダウンした感があったものの、今回の内容ではややタカ派な姿勢が目立った印象を受ける。22日(水)のブロックRBA総裁の講演でも「インフレの課題に対しては、金利による一段と大幅な対応が必要」との内容が示されており、マーケットがFOMCの引き締め停止ないしは利下げ開始のタイミングを探る環境において、上述の姿勢が豪ドル買いの材料となる可能性は十分にあると考えている。今週は28日(火)に豪小売売上高、29日(水)に豪10月CPI月次インディケーターの発表が予定されており、特にCPIについては今後のRBAの引き締め姿勢にも影響を与える可能性が大きいと考えられ、結果を注視しておきたい。また経済的な結びつきの強い中国では、米中首脳会談の実施や不動産開発会社への融資規制緩和の報道等、経済回復に向けての歩みを感じられる。中国の景気上向きは豪ドルの大きなサポートにもなるため、併せて動向に注目しておきたい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(11/20~11/24)の値動き:



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。